

## エルニーニョ監視速報 ( No. 214 )

2010 年 6 月の実況と 2010 年 7 月～2011 年 1 月の見通し

- ラニーニャ現象はこの夏に発生するとみられ、秋以降も持続する可能性が高い。
- インド洋熱帯域の海面水温は、夏には基準値より高い値で、秋には基準値に近い値で推移すると予測される。

### 【解説】

#### 太平洋

6 月のエルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は  $-0.7^{\circ}\text{C}$  だった。4 月の 5 か月移動平均値は  $+0.3^{\circ}\text{C}$  だった。6 月の南方振動指数は  $+0.5$  だった ( 図 1、表 )。6 月の太平洋赤道域の海面水温は、西部で正偏差、中部から東部にかけて顕著な負偏差だった ( 図 2、図 4 )。太平洋赤道域の海洋表層の水温では、中部から東部にかけて顕著な負偏差が見られた ( 図 3、図 5 )。太平洋赤道域の日付変更線付近の対流活動は平年より不活発で、西部では大気下層の東風偏差が卓越した ( 図 6、図 7、図 8 )。これらの状況はラニーニャ現象時の特徴を示している。

太平洋赤道域では、大気下層の東風偏差により中部から東部にかけて海洋表層の冷水偏差が強化され、今後もこの冷水偏差が持続すると予測されることから、中部から東部にかけての海面水温負偏差が持続すると考えられる ( 図 5 )。

エルニーニョ予測モデルは、エルニーニョ監視海域の海面水温が、予測期間中、基準値より低い値で推移すると予測している ( 図 9 )。

以上のことから、ラニーニャ現象はこの夏に発生するとみられ、秋以降も持続する可能性が高い。

西太平洋熱帯域の海面水温は、夏には基準値より高い値で推移し、秋には、次第に基準値に近づくと予測される ( 図 10 )。

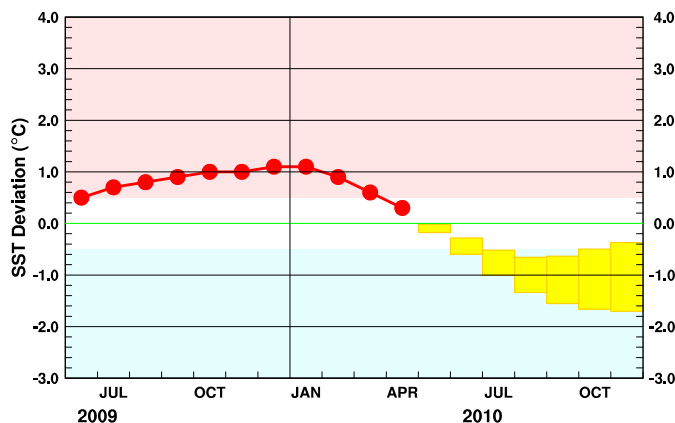
#### インド洋

インド洋熱帯域の海面水温は、冬から春にかけて基準値より高い値で推移した ( 図 1 )。夏には基準値より高い値で、秋には基準値に近い値で推移すると予測される ( 図 11 )。

#### 影響

6 月の日本の天候には、インド洋熱帯域の高温時の特徴は明瞭には見られなかった。今後の日本の天候については、最新の季節予報を参照されたい。

6 月の世界の天候には、インド洋熱帯域の高温時の特徴は明瞭には見られなかった。



この図は、エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差の 5 か月移動平均値の 4 月までの推移 ( 折れ線グラフ ) とその後の予測 ( ボックス ) を示している。各月のボックスは、海面水温の基準値との差が 70% の確率で入る範囲を示す ( 基準値はその年の前年までの 30 年間の各月の平均値 )。

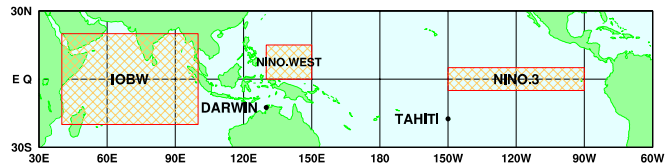
# 【監視・予測資料】

## 2010年6月における赤道域の海洋と大気の状態

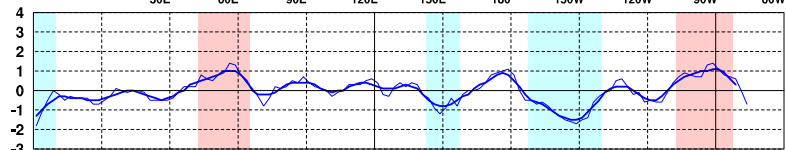
### 1. エルニーニョ監視指数 (図1、表)

エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は  $-0.7^{\circ}\text{C}$

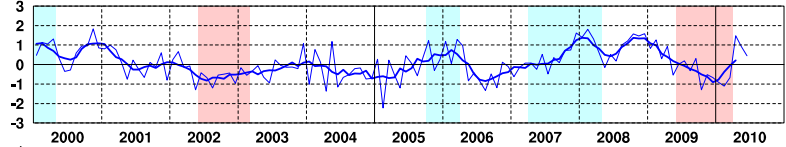
エルニーニョ現象等監視海域  
 NINO.3: エルニーニョ監視海域  
 NINO.WEST: 西太平洋熱帯域  
 IOBW: インド洋熱帯域



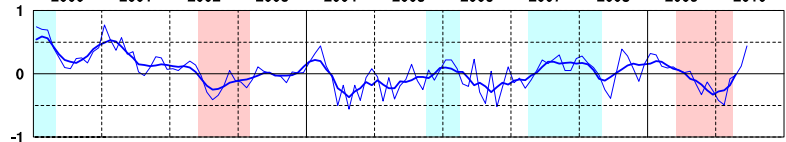
(a) エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値\*との差 ( $^{\circ}\text{C}$ )



(b) 南方振動指数\*\*



(c) 西太平洋熱帯域の海面水温の基準値\*との差 ( $^{\circ}\text{C}$ )



(d) インド洋熱帯域の海面水温の基準値\*との差 ( $^{\circ}\text{C}$ )

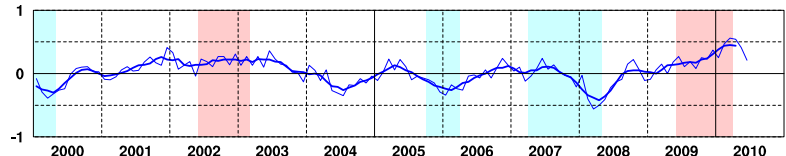


図1 各監視指数の最近10年間の経過

折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示す。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

\* 基準値：その年の前年までの30年間の各月の平均値 ((c) 西太平洋熱帯域、(d) インド洋熱帯域では、30年間のトレンドも考慮している)

\*\* 南方振動指数はタヒチとダーウィン (TAHITIとDARWIN; 上図に位置を示した) の地上気圧の差を指数化したもので、貿易風の強さの目安の一つであり、正(負)の値は貿易風が強い(弱い)ことを表している。平年値は1971~2000年の30年平均値。

表 エルニーニョ監視海域の海面水温と南方振動指数の最近1年間の値

5か月移動平均値の 下線部 は  $+0.5^{\circ}\text{C}$  以上となった月を、斜字体は  $-0.5^{\circ}\text{C}$  以下となった月を示す。

海面水温と南方振動指数の最新月は速報値である。

	2009年						2010年					
	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
月平均海面水温 ( $^{\circ}\text{C}$ )	26.6	25.9	25.7	25.7	26.3	26.6	26.7	27.2	27.8	28.1	27.1	25.8
基準値との差 ( $^{\circ}\text{C}$ )	+0.9	+0.8	+0.7	+0.7	+1.3	+1.4	+1.1	+0.8	+0.7	+0.6	0.0	-0.7
5か月移動平均 ( $^{\circ}\text{C}$ )	<u>+0.7</u>	<u>+0.8</u>	<u>+0.9</u>	<u>+1.0</u>	<u>+1.0</u>	<u>+1.1</u>	<u>+1.1</u>	<u>+0.9</u>	<u>+0.6</u>	+0.3		
南方振動指数	+0.2	-0.3	+0.3	-1.3	-0.5	-0.7	-0.9	-1.1	-0.7	+1.5	+0.9	+0.5

## 2. 海洋 ( 図 2 ~ 図 5 )

太平洋赤道域の海面水温は、中部から東部にかけて負偏差

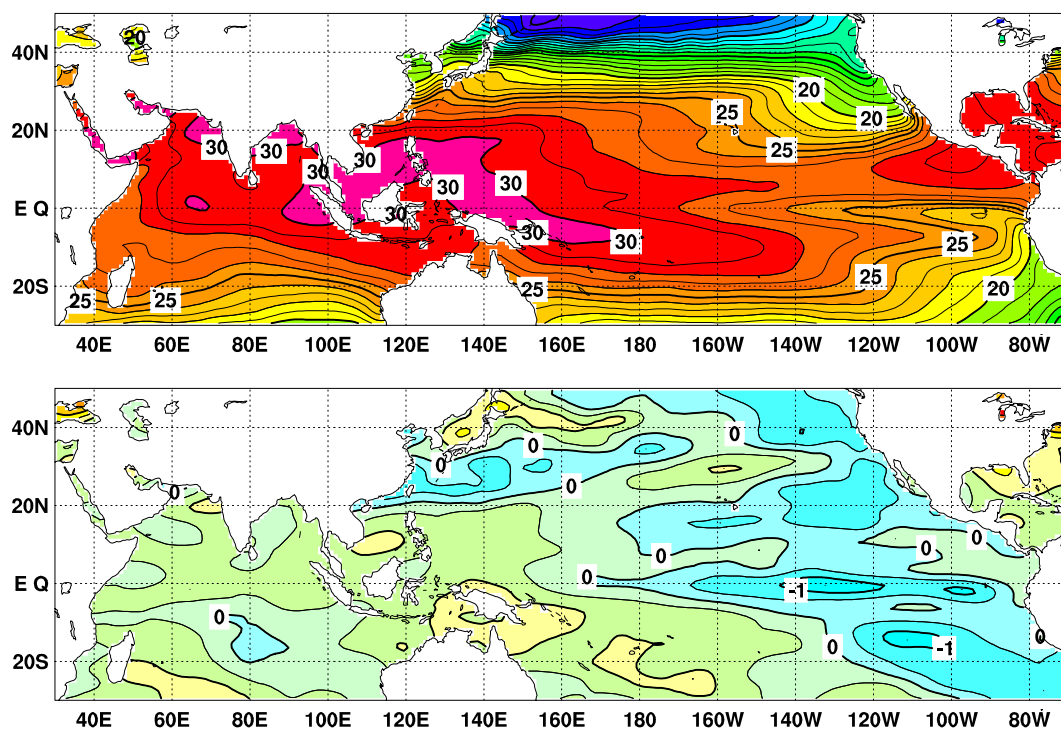


図 2 2010 年 6 月の海面水温図 ( 上 ) 及び 年 間 偏 差 図 ( 下 )

海面水温図の太線は 5°C 毎、細線は 1°C 毎の、年間偏差図の太線は 1°C 毎、細線は 0.5°C 毎の等値線を示す ( 年 間 偏 差 値 は 1971 ~ 2000 年 の 30 年 平 均 値 )

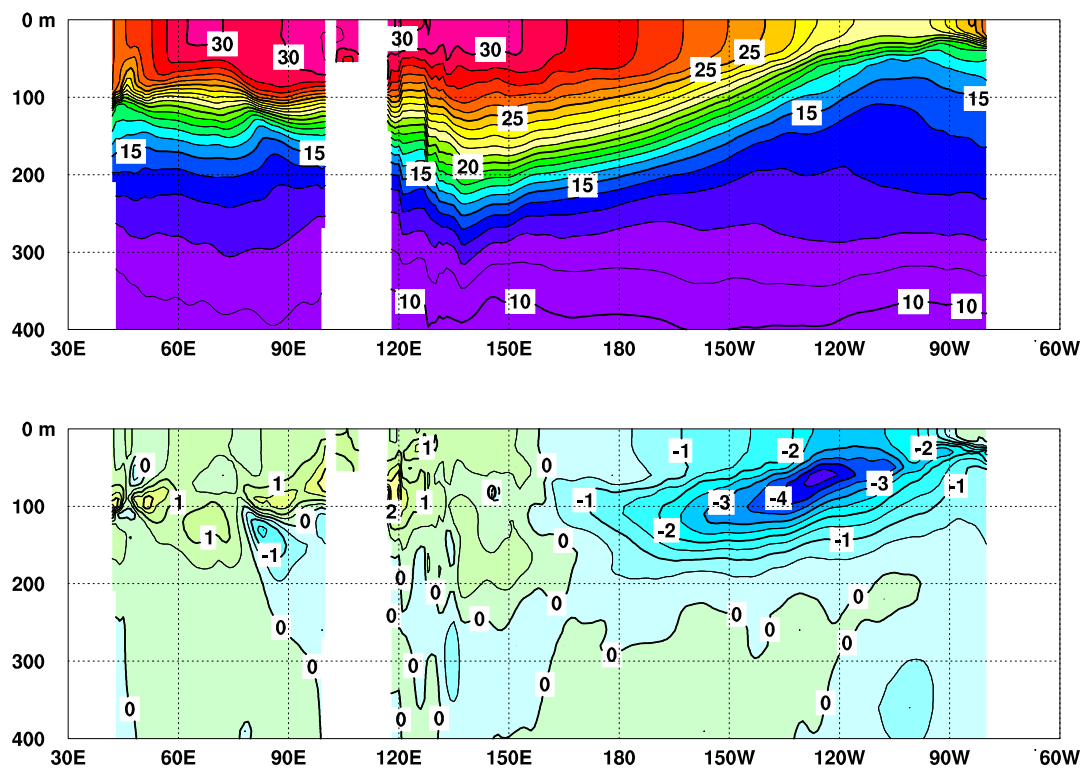


図 3 2010 年 6 月のインド洋から太平洋の赤道に沿った水温 ( 上 ) 及び 年 間 偏 差 ( 下 ) の 断 面 図

上図は太線が 5°C 毎、細線が 1°C 毎の等値線を示し、下図は太線が 1°C、細線が 0.5°C 毎の等値線を示す ( 年 間 偏 差 値 は 1979 ~ 2004 年 の 26 年 平 均 値 )。図中白く抜けている部分は陸地である。

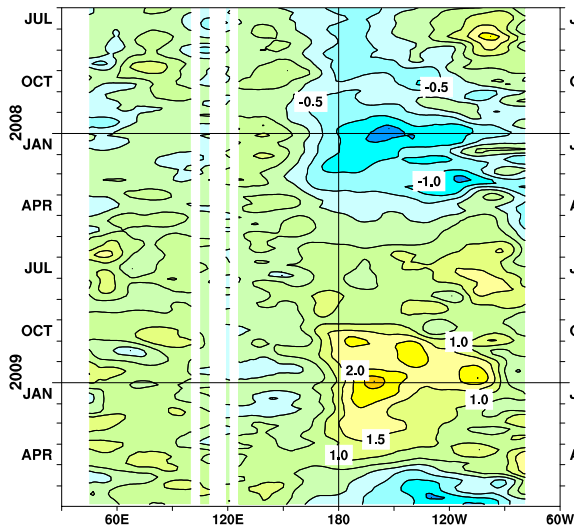


図4 インド洋から太平洋の赤道に沿った海面水温  
年偏差の経度-時間断面図

太線は  $1^{\circ}\text{C}$  毎、細線は  $0.5^{\circ}\text{C}$  毎の等値線を示す(平  
年値は 1971~2000 年の 30 年平均値)。図中白く抜け  
ている部分は陸地である。

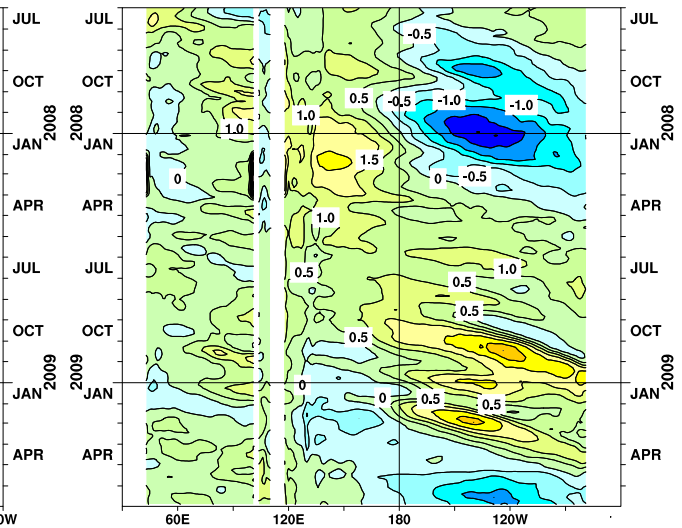


図5 インド洋から太平洋の赤道に沿った海面から  
深度 300m までの平均水温年偏差の経度-時間断面図

太線は  $1^{\circ}\text{C}$  毎、細線は  $0.5^{\circ}\text{C}$  毎の等値線を示す(平  
年値は 1979~2004 年の 26 年平均値)。図中白く抜け  
ている部分は陸地である。

### 3. 大気 (図6~図8)

#### 西部太平洋赤道域の大気下層で東風偏差が卓越

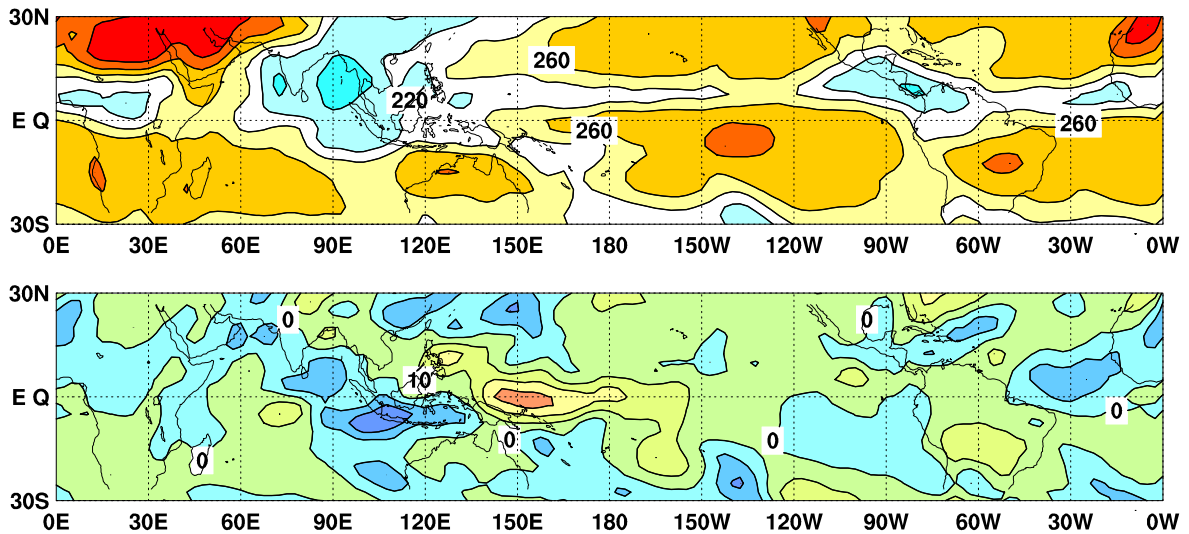


図6 外向き長波放射量 (OLR) (上) 及び年偏差 (下) の分布図 (2010 年 6 月)

OLR の値が小さいほど、対流活動が活発であることを示しており、上図では  $220\text{W}/\text{m}^2$  以下の領域に青の陰影を施し  
ている。下図では OLR が年偏差より小さく、対流活動が活発な領域に青の陰影を、OLR が年偏差より大きく、対流活  
動が不活発な領域に緑~黄~赤の陰影を施している(年偏差は 1979~2004 年の 26 年平均値)。上図は  $20\text{W}/\text{m}^2$  毎、  
下図は  $10\text{W}/\text{m}^2$  毎に等値線を描いている。OLR データは米国海洋大気庁 (NOAA) から提供されたものである。

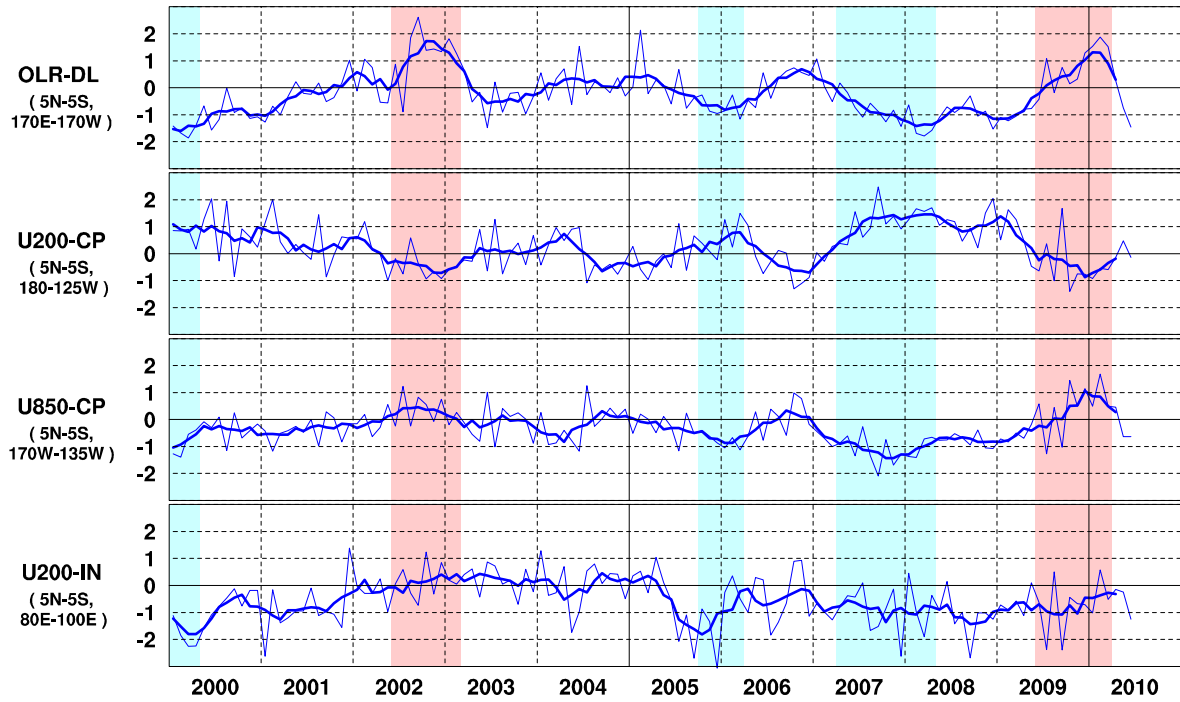


図 7 日付変更線付近の OLR 指数 (OLR-DL)、対流圏上層 (200hPa) の赤道東西風指数 (U200-CP)、対流圏下層 (850hPa) の赤道東西風指数 (U850-CP)、インド洋における対流圏上層 (200hPa) の赤道東西風指数 (U200-IN) の時系列 (上から順に)

折線は月平均値、滑らかな太線は 5 か月移動平均値を示す (平年値は 1979 ~ 2004 年の 26 年平均値)、赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

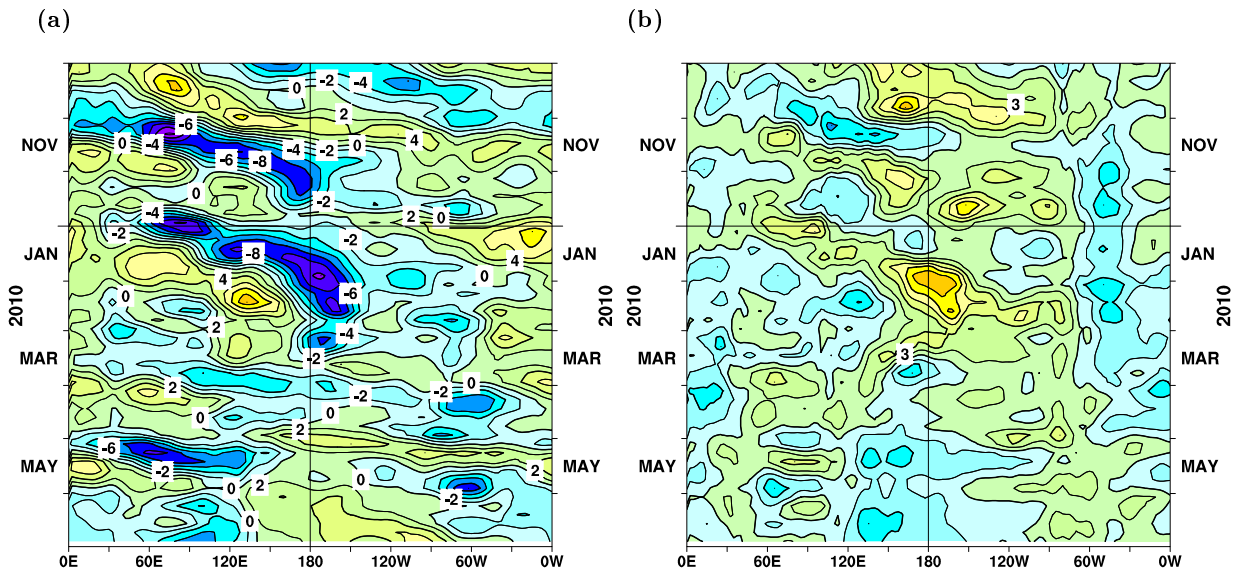


図 8 赤道付近における対流圏上層 (200hPa) の速度ポテンシャルの年偏差 (a) 及び対流圏下層 (850hPa) の東西風速の年偏差 (b) の経度-時間断面図

(a) 等値線の間隔は  $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$  で、平年よりも発散が強く、対流活動が活発な領域に青の陰影を、平年よりも発散が弱く、対流活動が不活発な領域に緑~黄~赤の陰影を施している。(b) 等値線の間隔は  $1.5 \text{ m/s}$  で、西風偏差の領域には緑~黄~赤の陰影を、東風偏差の領域には青の陰影を施している (両者の平年値は 1979 ~ 2004 年の 26 年平均値)。

## 2010年7月～2011年1月の海面水温予測 (エルニーニョ予測モデルによる)

エルニーニョ監視海域の海面水温は、予測期間中、基準値より低い値で推移する

インド洋熱帯域の海面水温は、夏には基準値より高い値で、秋には基準値に近い値で推移する

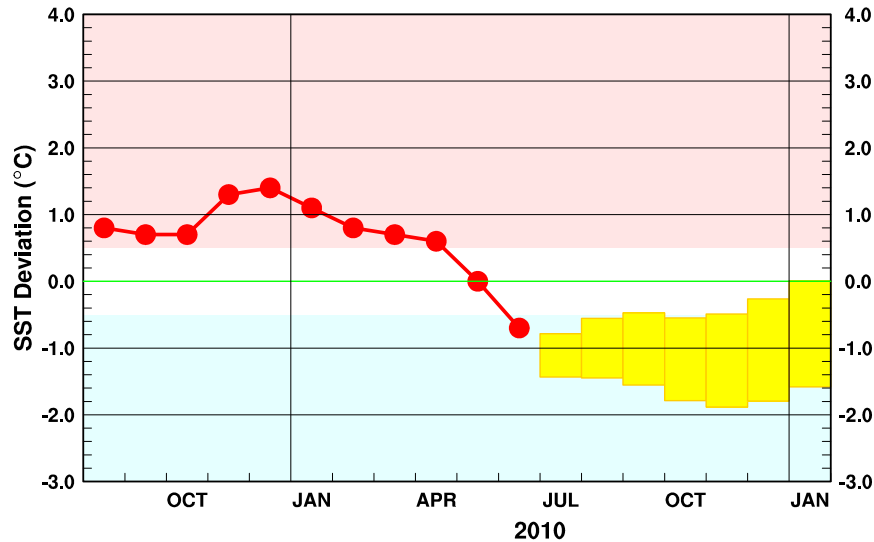


図9 エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差の先月までの推移（折れ線グラフ）とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測（ボックス）

各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。

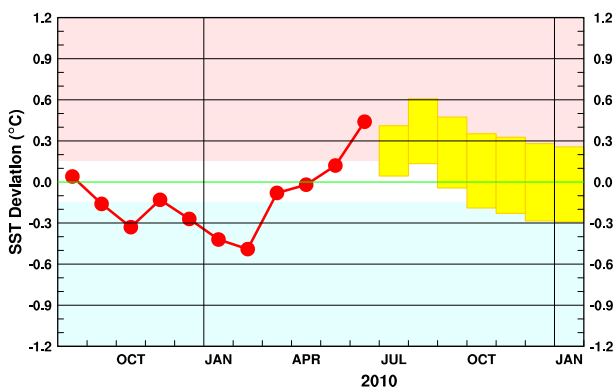


図10 西太平洋熱帯域の月平均海面水温の基準値との差の先月までの推移（折れ線グラフ）とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測（ボックス）  
各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。

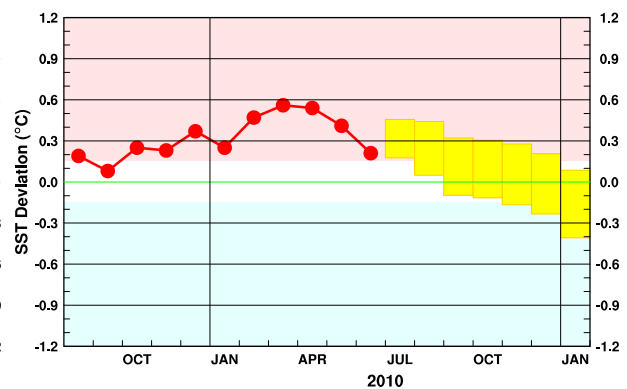


図11 インド洋熱帯域の月平均海面水温の基準値との差の先月までの推移（折れ線グラフ）とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測（ボックス）  
各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。

エルニーニョ現象などの情報は気象庁ホームページでもご覧になれます。

(<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/elmino/index.html>)

来月の発表は、8月10日14時の予定です。  
内容に関する問い合わせ先：気候情報課  
(電話 03-3212-8341 内線 5134、5135)